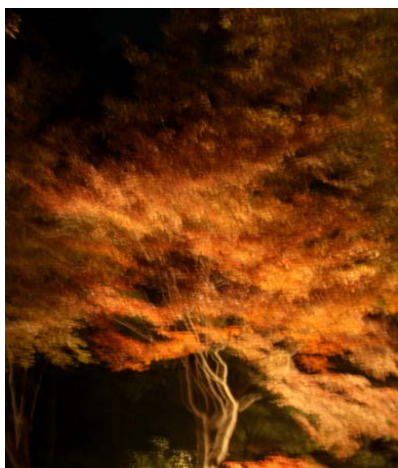


本格的な紅葉にお目に掛からぬ内に既に晩秋から初冬である。何とも残念である。21日から27日(日)までの予定で、関東の古刹平林寺の向いにある睡足軒で、紅葉のライトアップが行われるとあって家内共々出かけた。表千家のお茶が振る舞われ、紅葉亭では、著名な写真家原楨春夫氏の平林寺の四季折々の情景を見事に切り取った平林寺境内林写真『美しき瞑想』の作品展が行われていた。次の写真は小生の撮影であるが、ライトアップの美しさの一部すら表現できない。



(H17/11/27 山下撮影)

睡足軒は、「日本電力の王」との異名を持つ、電力業経営者でありながら、昭和の大茶人松永安左エ門翁が、現在の睡足軒を含む地域を購入して屋敷地とした。翁は、昭和13年飛騨高山から草庵と座禅堂を移築して友人を招いて囲炉裏を囲み、茶の湯を楽しんだ。翁は、論語の「六十にして耳順(したが)う」から「耳庵」と名乗った。翁の骨は平林寺に埋められ、田舎屋と敷地は平林寺に譲られた。平林寺は草葺の田舎屋を寮舎「睡足軒」として利用して来た。平成14年に青少年の体験学習の場や市民などによる日本伝統文化の活動場所として利用して貰えば幸甚」として新座市に無償貸与された。

平林寺(金鳳山、臨済宗の禅寺)は、武蔵野の面影を色濃く残し、平林寺境内林は、国の天然記念物に指定されている。元々は“さいたま市岩槻区”にあったが、寛文3年(1663)に川越城主松平伊豆守信綱の子輝綱が父の意思を継ぎ、現在地新座市の野火止に移し大河内松平家の菩提寺としたものである。境内には野火止塚、島原の乱の戦死者の供養碑や、五奉行の一人増田長盛の墓、野火止用水(折々の記 No11 参照)などがある。

因みに、睡足軒とは、白居易の「香爐峰下新ト山居草堂初成偶題東壁」(香炉峰下、新たに山居をトし草堂初めて成り、偶々東壁に題す)と題する七言律詩の起句「日高睡足猶慵起」(日高く睡り足れども猶ほ起くるに慵(ものう)し)に由来している。“日が高く十分に眠ったがまだ起きるのが億劫だ”と言う意味であり、松永翁の心境そのものであったのだろう。小生まもなく還暦とは言え、未だその様な心境にはなれぬ。

(参考: 新座市の HP 他各種の HP)